

茨城県行方郡玉造町

小貫館跡

発掘調査報告書

1996年

玉造町遺跡調査会
玉造町教育委員会

序 文

茨城県の南東部、霞ヶ浦の東岸に位置する玉造町は、町の大半は行方台地に属し、北東部一帯は標高30メートル前後のゆるやかな丘陵地となっています。傾斜地は山林、平坦部は畑作地帯で、私たちの郷土は古くより人々の生活の場となり、そこには幾多の歴史が残されています。現在でもその人々の生活の痕跡として、貝塚や古墳・城館跡等の遺跡が町内に数多く点在しています。

中世の玉造地方は、常陸大掾氏の一族であった玉造氏をはじめ、その分流と称される手賀氏、鳥名木氏及び多気大掾氏系の芹沢氏がそれぞれ進出しこの地に土着しました。今日の郷土の礎となった中世の土豪達が築いた城館跡と伝えられるものが、町内の20数ヶ所残されています。

この度、生活環境整備の一環としての墓地造成工事のため、小貫館跡の一部を緊急に発掘調査しなければならなくなりました。

しかし、小貫館については、城館主に関する伝承が主体であり、今回の調査により形態や規模などを遺構によって明らかになることは、意義深いものです。

なお、調査、報告書の執筆に至るまでご協力をいただいた、汀安衛先生には心より敬意を表し、この報告書が、郷土をより深く知る上で、貴重な資料として、広く一般の方々にもご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、宗教法人西蓮寺代表役員鈴木亮然氏をはじめ、西蓮寺関係各位の深いご理解とご協力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。また、ご指導賜りました茨城県教育庁文化課並びに茨城県鹿行教育事務所の先生方、調査にご協力いただきました地元関係各位に心から厚く感謝申し上げ、ご挨拶といたします。

平成8年5月

玉造町遺跡調査会長

玉造町教育委員会教育長

島田 隆四郎

例　　言

1. 本報告書は、茨城県行方郡玉造町大字西蓮寺477-1番地ほかの発掘調査報告である。
1. 本遺跡の調査は、墓地造成工事に先行する埋蔵文化財の調査である。
1. 本遺跡の現地調査は、平成8年5月13日～24日まで行ない整理作業は平成8年5月25日～8月22日まで行った。
1. 本遺跡の調査は、鹿行文化研究所の汀安衛が担当して行った。
整理作業は、横田泰隆が水洗い、注記、遺物実測、戸島和子が図版の原図作成、トレース、佐々木トミ子が図版組み拓本、図表を行い汀が執筆及び総括して行った。
1. 本報告書の縮尺は、遺構に関しては、 $\frac{1}{10}$ 、 $\frac{1}{20}$ 、 $\frac{1}{40}$ 、 $\frac{1}{80}$ を基準とした。遺物は、 $\frac{1}{3}$ が基準である。水糸のレベルは、統一表示を基準としたが、不可能な場合は、その図中に表示した。
1. 本調査にあたり次の方々に協力をうけた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）
汀安衛、横田泰隆、佐々木トミ子、戸島和子、人見美智子（以上鹿行文化研究所）
三橋昭二郎、根崎幸男、根崎三郎、根崎 克、額賀のぶ、根崎モト、根崎きい、滝ヶ崎スイ
(以上地元調査協力者)
鈴木亮然、金塚市郎、大森四郎、小島道弘、山口 操、西谷茂雄、関野 保、西谷嘉久、
郡司 豊、磯山福男、石崎静夫、根崎 清（以上西蓮寺関係者）
有限会社兼平工務店
1. 調査及び報告書作成に当っては、茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所ほか、各方面の方々にご指導、ご協力を賜った。末尾ながら感謝の意を表する次第である。

目 次

序 文	1
例 言	2
目 次	3
I 位置と環境	5
II 調査に至る経過	6
III 調査経過	7
IV 調査の概要	9
V 遺構と遺物	9
1 小 貢 館	9
2 建屋 遺 構	11
第 1 号 建屋	11
第 2 号 建屋	12
3 溝 遺 構	14
第 1 号 溝	14
第 2 号 溝	14
第 3 号 溝	14
4 井 戸	16
5 虎 口 法 面	17
6 人 骨	17
7 表 採 遺 物	20
石 器	20
8 瓦	22
9 陶 磁 器	23
10 西蓮寺の創立と沿革	26
VII 結 語	29

挿 図 目 次

第 1 図	遺構周辺の遺跡と地形	5
第 2 図	遺構全測図	8
第 3 図	小貢館と西蓮寺堂宇	10
第 4 図	建屋遺構 1 号・2 号実測図	12
第 5 図	建屋遺構 1 号・2 号実測図	13
第 6 図	第 1・2・3 号溝実測図	15
第 7 図	井戸実測図	16
第 8 図	トレンチ出土古銭拓影図	17
第 9 図	出土土器・表採土器実測図	18
第 10 図	表採石器実測図	20
第 11 図	表採石器実測図	21
第 12 図	表採瓦実測図	22
第 13 図	表採出土陶器実測図	23
第 14 図	表採出土陶器実測図	25
第 15 図	明治十六年前と平成 8 年の現況図	29

写 真 図 版 目 次

P L - 1	表土除去後の全景、上 館・虎口と調査区、下
P L - 2	調査区虎口全景、上 虎口と法面全景、下
P L - 3	柱穴 1・2 号土層、上 柱穴 3 号土層、下
P L - 4	柱穴 4 号土層、上 柱穴 5 号土層、下
P L - 5	調査終了全景、上 建屋柱穴群と溝、下
P L - 6	2 号溝のプラン、上 2・3 号溝土層、下
P L - 7	3 号溝土層、上 3 号溝遺物出土状態、下
P L - 8	井戸遺物出土状態、上 井戸終了状態、下
P L - 9	調査終了全景（参道側から）上 同全景（虎口側から）下
P L - 10	人骨・六文銭出土状態（トレンチから）上 供養祭、下
P L - 11	六文銭と刃装金具、上 御協力をうけた方々一同、下
P L - 12	五輪塔の一部、車止めの石柱、灯籠、墓石？、出土土器（溝・ビッド）、表採瓦、急須・环・卵の模造品・摺鉢、その他、陶器・陶磁器、西蓮寺山門と常行堂、山門全景、相輪様

I 位置と環境



第1図 遺構周辺の遺跡と地形

本遺跡は、茨城県行方郡玉造町大字西蓮寺479番地に所在する。遺跡は霞ヶ浦から入り込む谷津が樹枝状に解析し、これらに延びる半島状台地中程に占地する。標高は25m前後を測る。台地南側の傾斜面部に位置する。以前は畠地として利用されている。

台地上には天台宗の名刹西蓮寺の堂宇が整然と立ち並び今日にいたっている。西蓮寺の位置する台地は測量調査によって館の可能性があり『西蓮寺』の建立年代と館の関係がどのようになるか興味がつきない所で有る。周辺には井上貝塚、井上古墳群、手賀城跡等などの遺跡が存在し貴重な遺物が出土している。中でも手賀城跡はかなり良好な状態で残され中世の典型的な岡城として今日に往時の面影を伝えている。その他玉造城跡、芹沢館等が見られる。古くは若海貝塚、三昧塚古墳等が今日に残されている。

以上のような自然環境に恵まれた地域に本遺跡は存在しているが調査は遺跡の一部で針の穴から象見るような感じで有り本調査をもって西蓮寺の形成過程を断定すべきでは無く一資料としての見方として取るべきと理解する。なお本調査に入る以前に西蓮寺域の測量調査を実施し調査区域の位置、性格を把握し調査に入った。予備調査で有る。

II 調査に至る経過

玉造町大字西蓮寺、天台宗の古刹、西蓮寺の堂宇が立ち並ぶ境内の、ちょうど仁王門の南側にあたる畠地において、宗教法人西蓮寺より墓地造成が計画された。これは墓地不足に伴う地元の要望が高いことによるものであった。

事業の計画に先立ち、宗教法人西蓮寺代表役員鈴木亮然氏より、玉造町教育委員会に平成8年2月6日、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて」の照会があった。この内容は、西蓮寺境内の南側部分の約5,000m²の墓地造成計画であった。

このことを受け玉造町教育委員会では、遺跡台帳との照合及び現地踏査を実施した。この照会の部分は、周知の遺跡である「小貴館跡」の一部に当たり、平成8年2月8日付、玉教委発第49号において、小貴館跡の所在する旨の回答する。

この後、事業主と玉造町教育委員会との間で、埋蔵文化財の取り扱いについての協議を重ねた。その結果、申請地は墓地不足に伴う地元の要望が高いことによることや墓地立地の条件的な関係などから、現状保存は困難であることから、埋蔵文化財の記録保存としての発掘調査を実施することと合意した。

今まで小貴館については、伝承が主体で史料等がなかったため、事業者との発掘調査についての協議に先立ち、鹿行文化研究所の汀安衛先生の協力を得て、小貴館跡の測量調査を実施し縄張り図を作成した。

その結果、城跡は現在の西蓮寺境内全域にわたり、繩張りは南側に凹部状にのび、西側の旧参道であった掘込みは、城の虎口として利用している。また、虎口の途中からY字状に分かれ一段低いテラスと、かなりの勾配で傾斜し三段の土壘が構築されている。境内の北側はほぼ自然の地形を利用し、東側は全体に弱い横矢掛かりが認められることがわかった。

なお、小貴館の遺跡の存在する台地に、天台宗の古刹、西蓮寺の堂宇が立ち並んでおり、両者との関係も注目されるところである。

この繩張り図をもとに協議を行い、西蓮寺境内の南側の凹部状にのびている、虎口左側の畠地部分を一次調査（2,000 m²）として実施することとした。また、虎口右側の畠地部分は、後日二次調査とし実施することとした。

発掘調査は、鹿行文化研究所の汀安衡氏に到査を依頼し、西蓮寺総代の皆様、地元皆様の協力をいただき、同年5月から実施するに至った。

III 調 査 経 過

本遺跡は前述のとおり測量調査を実施し今回墓地造成工事を行う部分の遺構の有無。と館の法面の角度、館としての虎口形態の一部が把握出来れば幸いと考え調査に入った。

以下調査日誌を列記し経過に替えて。

5月13日 本日より重機によりばっさいした雑木、埋めた土砂の除去作業。

5月14日 本日も前述同様の作業ではば埋められた土砂を取り除く。

5月15日 本日より作業員をいれ遺構確認作業に入った。

5月16日 1、2号溝の調査を開始する。

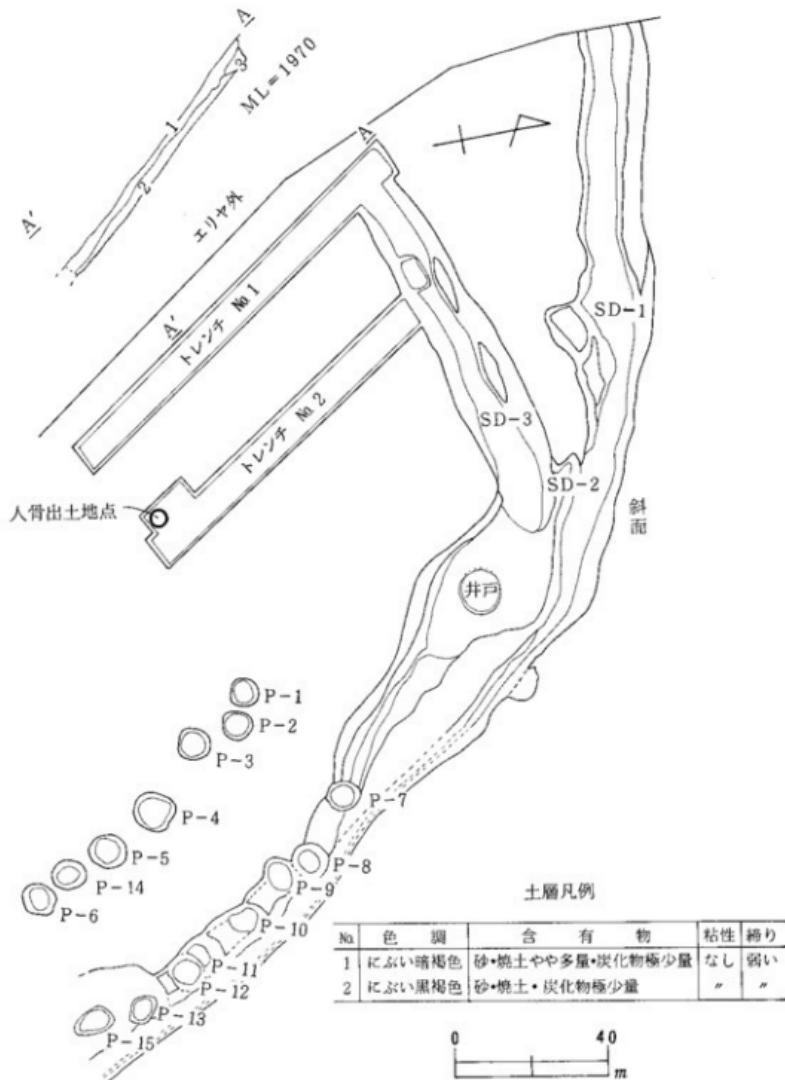
5月17日 井戸が確認され調査開始、3号溝調査開始。

5月18日 井戸掘り。土層図作成。トレントチ設定し調査開始。

5月20日 井戸掘り続行。トレントチ調査南側から人骨、宋銭出土。火葬？。

5月21日 建屋の調査、2軒に成るか、五輪塔の一部出土。建屋測量、エレベーション。

5月24日 全測図、法面調査。遺物、遺構、テントかたづけ。本日で全ての作業終了し午後ささやかな慰労会を催し解散とした。



第2図 遺構全測図

IV 調査の概要

本遺跡は前述のとおり谷津の中程の半島状台地斜面部に所在する。以前は畠地として耕作されていた。北、東側は館の一部として構築がなされ、とくに東側は虎口形態がよくのこり時代を推察する根拠になる。

調査は前もって測量調査を行い大方の位置関係と館形態、堂宇の配置が確定していた為調査区域がどのような場所に成るか、遺構の在り方等が調査前に推察された。しかし調査の結果はかなり差違が見られた。法面の角度はほぼ想定どおり下端には掘りは無く畠の寄せ上げの跡、溝が2条浅く認められた。法面下端には建屋が2軒検出されこれに伴う井戸が見られ深くて完掘出来なかった。湧水と深さのため有る。その他トレンチから人骨、火葬か？六文銭が7枚出土している。3号溝から五輪塔の水輪が出土法面から寛水通宝が出土している。

その他西蓮寺にかかる遺物、陶器がかなり出土している。遺構は存在検出されなかつたが縄文時代の石器が11点出土している。その他、摺鉢、瓦等が見られたが最大の問題は西蓮寺との関係で有る。館と寺の時代的な問題、建屋と寺の問題等が特定出来なかつた。今後の研究課題、重い宿題となつた。

V 遺構と遺物

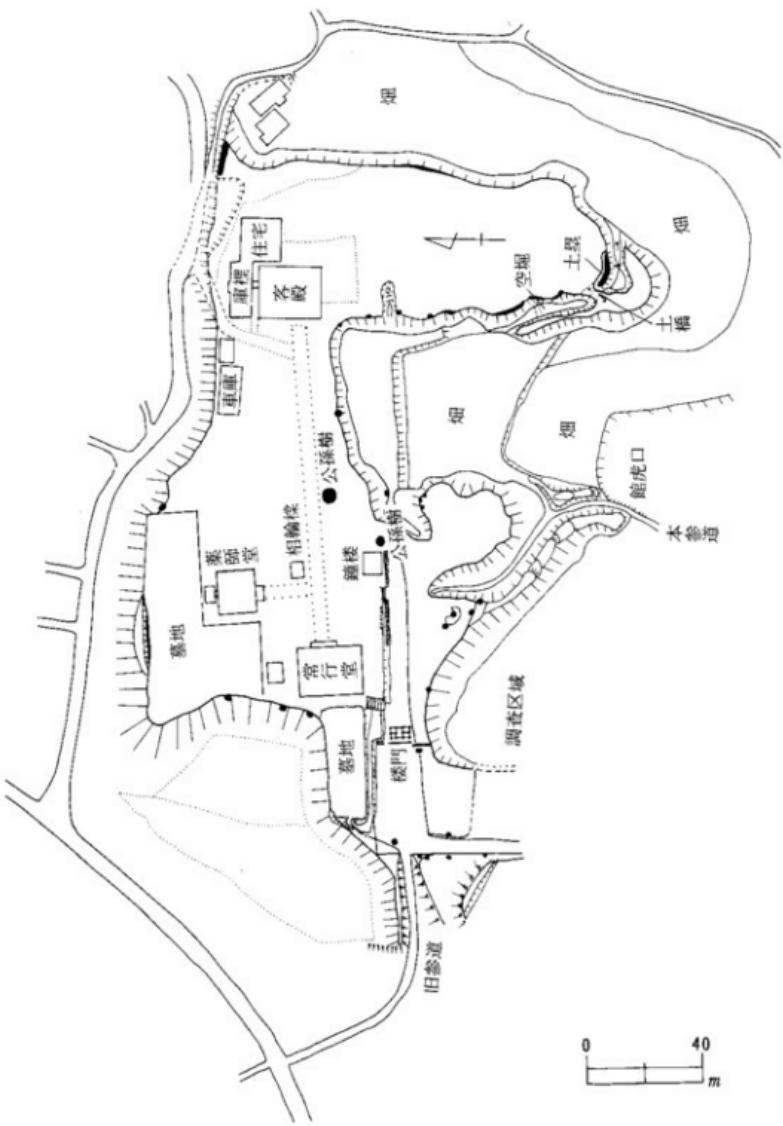
本遺跡は前述のとおり谷津の中程の半島状台地斜面部に所在する。以前は畠地として耕作されていた地区で東側は館の一部として構築がなされ、とくに東側は虎口形態が良く残り時代を推察する根拠になる。

発掘調査前に『小貫館』の測量調査を行い大方の位置関係と館形態、堂宇の配置を確定し調査位置をつかみ調査方法を検討し館法面角度、下端の掘の存在を中心として開始した。以下調査によって検出された館の全測図、建屋、溝、井戸、法面、人骨の順位に述べる。

1 小貫館（第3図）

本館は玉造町遺跡台帳に記載され、町史にも報告、記載がなされているが明確な根拠、図面の提示の基本が欠けている為本測量調査によつた図面を基に館の構成を検討してみたい。本館は南側に幅150m程の谷津に面し、北側は小谷津の奥で低地凹地になり人家が立ち並んで一種の〔門前町〕的様相を呈し、北側の台地との接続部は現在道路として利用され3mほど低くなつており上幅6m程を計測する。

繩張りは南側に凹部状に伸び西側の部分に掘りを掘り虎口とし曲線状に掘込み途中からY字状に別れ南側は現在の鐘楼の前へ続く、右側は一旦平坦部に出てから左に曲がり鐘楼の東側に続く。



第3図 小賓館と西蓮寺堂宇

この部分はテラス状に一段低い。本来馬出し場に利用したか、大手口に当る部分は用側に土塁を築きかなりの築城技術を用いてる。西側の土塁は三段に築かれておりそれぞれ段を持ち幅を増し、高さも増す。南側は全体に現地形を利用した築城方法。楼門部分の西側に一段小曲輪が存在、旧参道部分と畠の付近に土塁に依る外郭が存在するか。現在の墓地、常行堂、薬師堂、鐘楼部分が一曲輪を形成するか？北側はほぼ自然地形をそのまま利用している。部分的に横矢掛かり認められる。法面は30°～60°前後の角度を持ち20m前後下る。途中にテラスは存在しない。

東側は全体に弱い横矢掛かりが認められ土塁の存在が想定される。南側はテラス部分から空堀が掘込まれ外側に土塁を持つ。土橋が存在西側は小刻みな横矢状屈曲が存在する。この先端部、本堂南側には一曲輪存在すると仮定される。

小貴館は3曲輪からなる中世中葉の館と推定される。城の表現、言葉は本構成から除外しておきたい。さらに西蓮寺との関係が重要になる。

つまり西蓮寺が建立されてから館が構築されたのか？小貴館、その中に西蓮寺が建立されたのか、断定する資料が今回の調査では確証を得られる遺物、遺構は検出できなかった。

玉造町史からは明確な結論は得られず、本調査を以て断定すれば館と寺は共存していたと理解される資料しか認められなかった。又本寺住職の寄稿文からも同様な意味が読み取れる。

また昭和6年8月1日発行の西蓮寺市の研究注1からは前述の考え方が妥当と推察される。

注1 本研究は海老原 幸氏の調査研究の集成である。更に再検討がおられる部分がみられる。

2 建屋遺構（第4図、第5図）

本遺構は、調査区の東側の館の虎口に添うように法面に平行して建てられていた。柱穴の配列から2軒に分類することが可能であった。これらは新旧関係が存在する為古い建屋を1号建屋、新しい建屋を2号建屋と呼称し後述する。

1号建屋

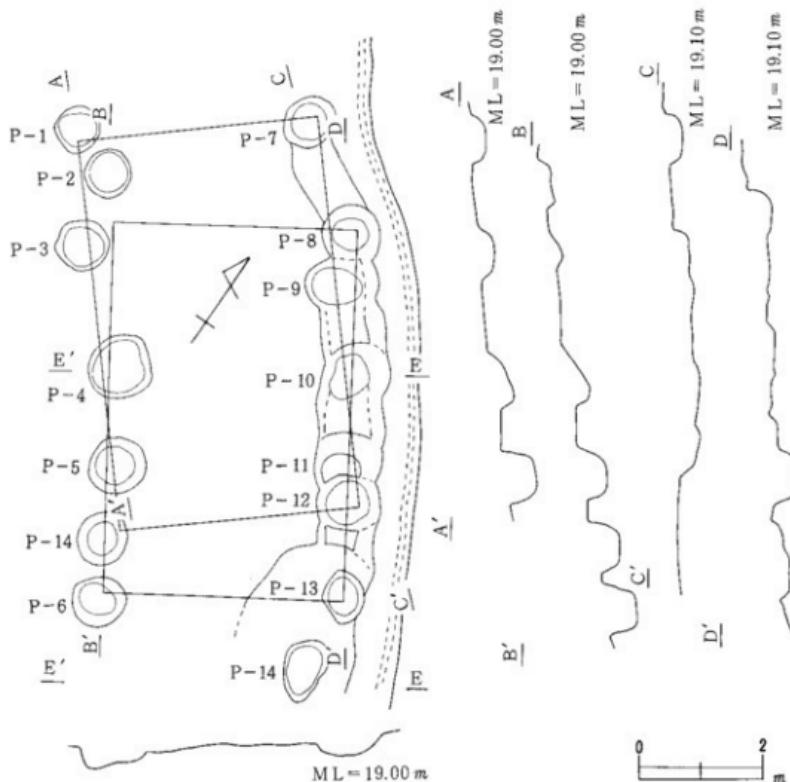
本遺構は、調査区の東側に位置し一部山を削り（注1）この部分に柱穴を掘込み道場状の様式の建屋が存在した。方位はN-139°-Wに亘り南北6.30cmを測る。一間2m10cmで3間、東西は9尺間で約2mの間取りである。柱穴は、全て円形で浅い溝の中に掘込まれており1は径70cm、深さ30cmを測る。3は径80cm、深さ20cmを測る。4は径1m、深さ30cm、14は径80cm、深さ40cmを測る。7は径70cm、深さ30cm、9は径70cmで深さ30cm前後、10は径1m前後、12は径80cm前後で深さ40cmを計測する。

以上の数値、遺物から本建物は戦国時代の建物と推定される。つまり館、西蓮寺と同時に建屋が存在していたと推定される。それは『宿坊』的可能性が高い建屋と推察する。

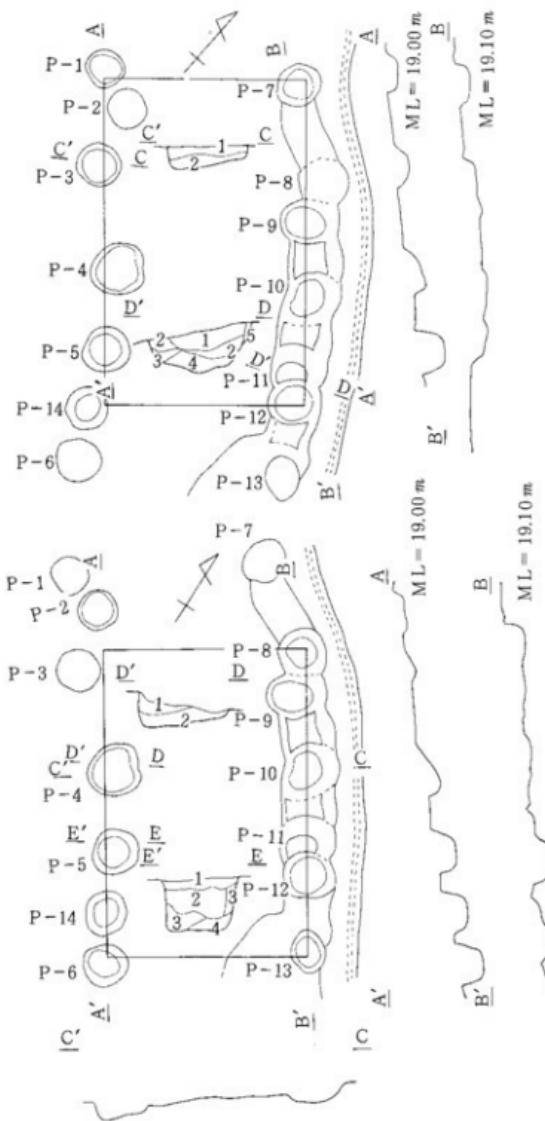
柱穴の土層はP3は暗褐色で砂を含む。2層は黄褐色で砂多量。P13は4層で鈍い黒褐色、暗褐色で砂多量。粘性は弱い。3層は橙色で砂多量。4層淡い橙色で砂多量。いずれも粘性、締まりは弱い。P4からロクロ整形の壺状の土師器が出土している。遺物は、平底で底部は回転系きりの後鑄ナゲ調整している。これらからやや古手の建屋と推察する。

2号建屋 (第4図、第5図)

本遺構は、1号建屋の東側に位置しやや南側に振れる。N-149°-Wに方位を置く。本建屋は、ほぼ同位置に検出され長さ6mで幅は3m90cmを測る。一間1m80cm前後で裏側、法面側は1間の寸法は差が認められる。東側も1m90cm前後の間取りであり、いずれも宿坊的な建築様式である。P4、5、6、8、10、11、13で径90cmで深さは20cmから50cmを



第4図 建屋遺構1号、2号実測図



上層凡例		P-3		P-11	
No	色調	含物	粘性	性	弱い やや弱い
1	暗褐色	砂・多量	弱	い	弱い やや弱い
2	褐色	砂・少量	"	"	"

上層凡例		P-3		P-11	
No	色調	含物	粘性	性	弱い やや弱い
1	暗い黒褐色	砂・少量	弱	い	弱い やや弱い
2	暗褐色	砂・多量	"	"	"
3	褐色	砂・少量	"	"	"
4	褐色	砂・少量	"	"	"

土層凡例		P-4		P-5	
No	色調	含物	粘性	性	弱り
1	暗褐色	砂・多量	弱	い	やや弱り
2	褐色	砂・少量	"	"	"

土層凡例		P-4		P-5	
No	色調	含物	粘性	性	弱り
1	暗い黒褐色	砂・少量	弱	い	やや弱り
2	褐色	砂・多量	"	"	"
3	褐色	砂・少量	"	"	"
4	褐色	砂・少量	"	"	"

第5図 建屋遺構1号、2号実測図

測る。

以上の計測値から前述の建屋とさほど時間的差はないと考えられる。覆土は前述の柱穴同様で砂を多量に含む。粘性、締まりは弱い。

遺物は皆無で時期を特定する出来る遺物はない。一間間の寸法から江戸時代初頭前後が推定される。

本建屋も前述同様宿坊的性格の遺構と推定される。

3 溝

本遺跡からは3条の溝が検出された。これらはいずれも館の法面下端に掘込まれていたもので館との境、溝と推察される位置関係にあった。以下これら溝について検出された順番に遺構番号を付したのでこれにしたがって後述する。

1号溝（第6図）

本溝は、一番端に位置しその北側には畠の『寄せ』が位置し一部調査し確認した。断面図の8、9層が本溝、『寄せ』で土層は黒色で9層は底部の二酸化鉄の砂層が混入している。締まり、粘性はない。大部分腐食土である。

1号溝は西側から東側に掘込まれていた。これは地形的な原因に起因する。長さは調査範囲では30mで西側は土砂の埋め立ての為調査出来ず、東側は耕作のため消失する。最大幅は70cm前後、狭い部分では33cm前後でかなり変形している。

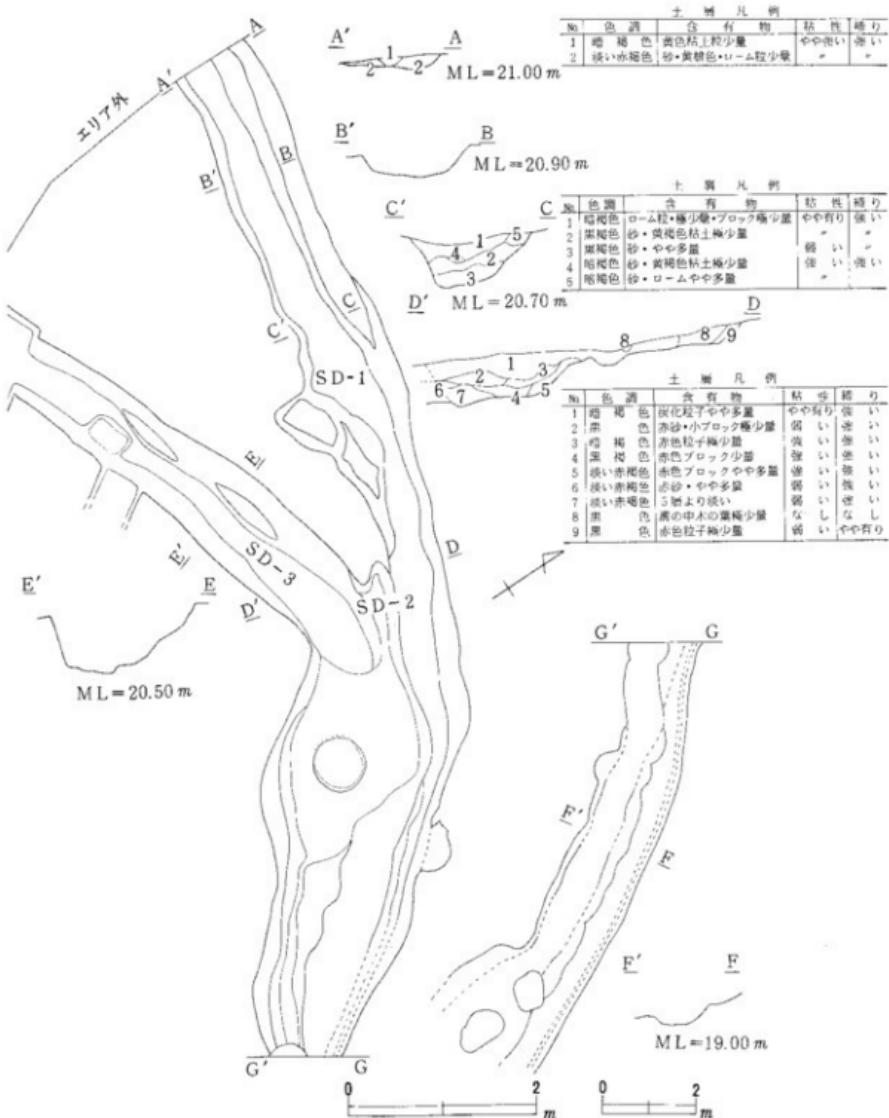
覆土は、1層の暗褐色層でローム粒、ブロックを少量含む。粘性、締まりはやや有る。下方では幅は狭く溝状になる。この部分では虎口土壌部分の土砂崩れが見られ流れを確認し掘込みは安全上断念した。2ヶ所程崩れが存在していた。

2号溝（第6図、第8図）

本溝は途中から掘込まれ途中には井戸、下方では建屋、柱穴が掘こまれている。全体に浅い溝で緩やかなU字状形態。途中西側には3号溝が掘込まれ西側に延びる。全体に搅乱、切り合いの多い溝である。覆土は5層で全体に暗い。色調は暗褐色、黒褐色層が基本でローム粒、砂、黄褐色粘土を含む。締じて締まりは弱い、粘性も同様で有る。下方は建屋柱穴の上を掘込み下部は消失している。本柱穴からは遺物はなく時期を特定出来なかったが切り合い関係から前述の建屋より内法寸法、遺構切り合いから新しくなる遺構で有る。

3号溝（第6図、第8図）

本遺構は2号溝の途中から西側に向かって延びるかなり深い溝で長さは調査範囲で11m、幅80cm前後でU字状掘込みで深さは70cm程を計測する。土層は5層で暗褐色、黒褐色、等が見られほぼ自然堆積と推察できる土層である。ローム粒子、ブロック、砂、黄褐色粘土を含み粘性、



第6図 第1号, 2号, 3号溝実測図

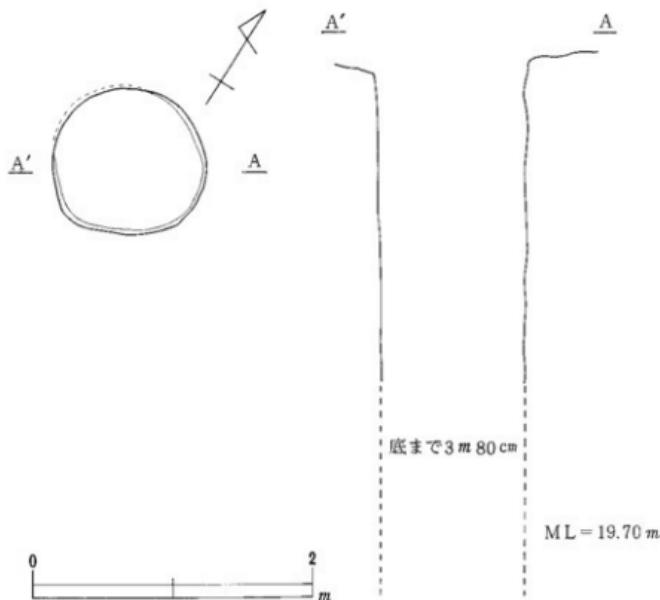
締まりは強い。遺物は8図に示すように常滑の水甕、6、7が見られ図示出来なかった五輪塔の水輪部分が出土した。高さ55cm、径60cmのかなり大型の塔で有る。これらの遺物から本溝は戦国以前の溝と断定される。石材は擬灰岩で有る。本溝と建屋は時期的に大差ないと理解される。

なお1号溝からは常滑の摺鉢、2号溝からはほうろくが出土している。

4 井戸跡（第7図）

本遺跡からは建物の西側から井戸跡が検出されたが2m50cm程の部分から湧水が激しく安全上から調査は不可能と判断し底部迄の深さ3m80cmを確認し調査を終了とした。調査中は竹を割りタガとして安全を確保しながら調査を進めた。

ほぼ円形で径1m、南側がやや直線的で有る。二酸化鉄を含む砂岩に近い岩盤で2m付近から砂層に変化して湧水が激しくなった。2号溝の中に位置していた。遺物は皆無で時期は特定出来ないが建屋の井戸と推定され、本時代の遺構と推察出来る。



第7図 井戸実測図

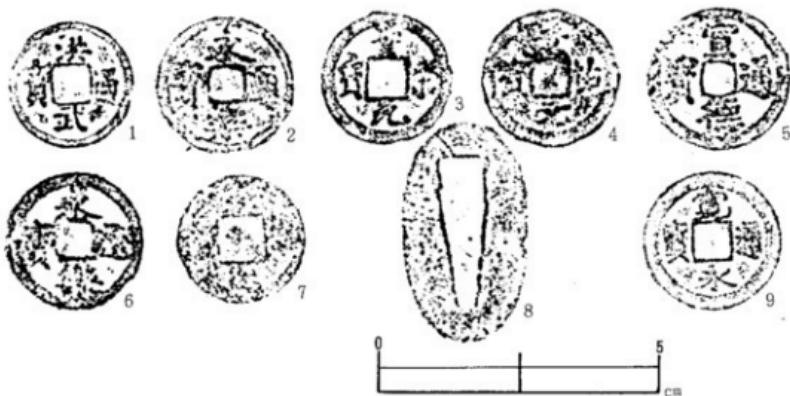
5 虎口法面

本虎口部分は調査区の東側に位置している為どのような工事を進めたのか、防御上どのような方法を用いたのかが課題でありそのため山門部分、これから10m付近、虎口部分の3ヶ所法面観察トレンチを設定し調査を進めた。

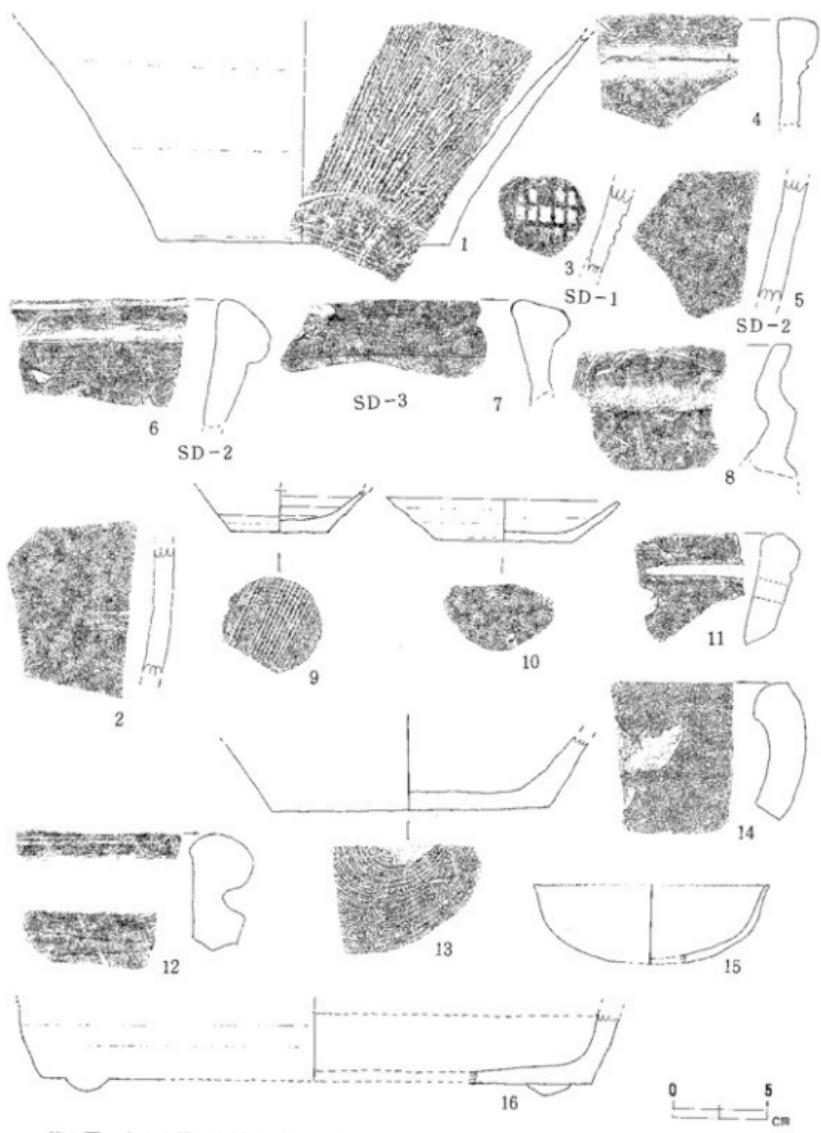
その結果いずれも地山をカットし約50度の角度で旧山根部分をカットし虎口西側の備えとしたことが判明した。建屋部分の地盤から6m前後カットしていることがわかる。これらから本面は人口的に、又横矢掛かり気味に設計、工事がなされている事が断定出来る。本衣土層から寛永通宝が1枚、鍔の一部が出た。いずれも本遺構とは時代的に伴うものではない。

6 人骨

本人骨は中央部に設定したトレンチの南側端部に検出されたもので当初から埋葬の伝承が存在した訳ではない。偶然に調査途中に骨の出土を見たが、かなり骨粉化し人骨かどうかは当初断定是不可能であり銭の出土を見て人骨と断定した。特定出来る部位は認められなかった。人骨と断定した理由は六紋銭の出土を見たからで遺存する骨を観察すれば人骨は幼年期の者と推定出来た。本地区に伝承、墓地の跡も存在しない事からかなり古い戦国時代以前のものと推察され前述の建屋の時代前後が推察される。出土した古銭は洪武通宝(明) いずれも初鋤年号。永楽通宝2枚で1枚は鉄銭、□元通宝(3)は鉄銭、淳祐元宝?南宋、宣德通宝(明)が副葬されていた。



第8図 トレンチ出土古銭拓影図



第9図 出土土器・表採土器実測図

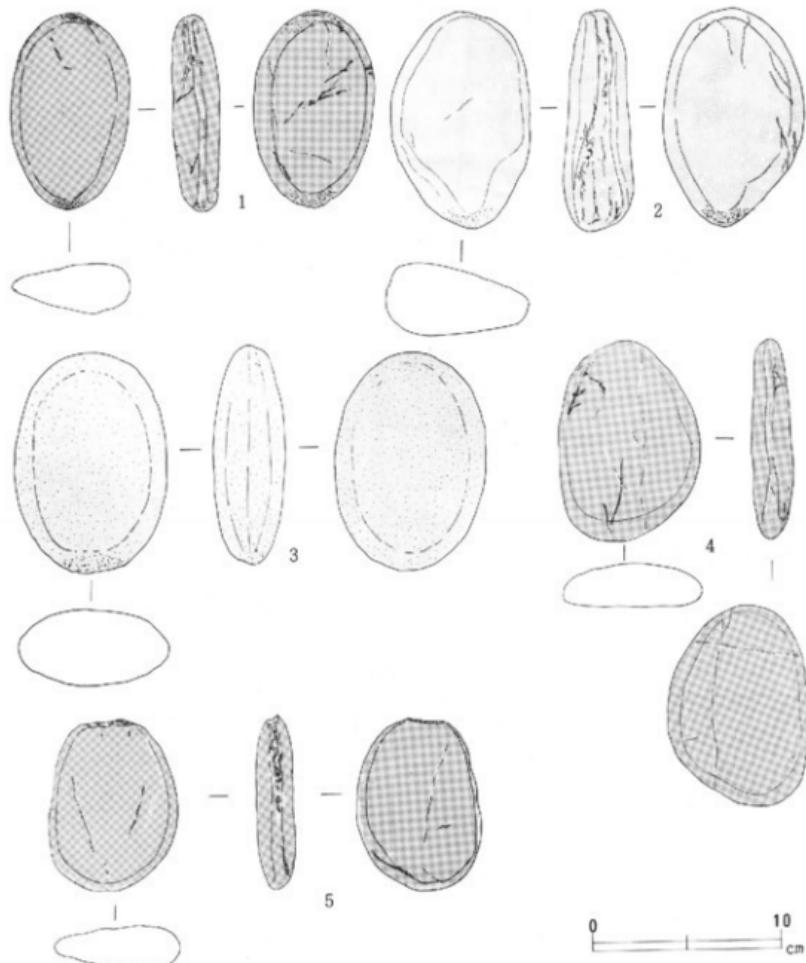
出土土器観察表

番号	器種	法量 cm	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	摺鉢	A - B - C 15.4	常滑の摺鉢で粗雑指頭痕を残す。	クロ水挽き 手びねり	輪積み 茶褐色 良い	覆土中 30%
2	カメ	-	常滑の壺洞部。	ナデ、指頭でおさえる。	礫多量 淡い茶褐色 良い	破片
3	甕か?	-	畫母・長石多量、格子状タタキ目をもつ。	ナデ	砂多量 やや悪い	"
4	内耳	-	口径部肥厚。	クロ水挽き か。	礫 にぶい黒褐色 良い	"
5	カメ	-	常滑のカメ輪積み。		礫多量 茶褐色 良い	"
6	内耳?	-	内耳系の土器。内側に媒付着。	クロ水挽き	雲母、砂少量 長石	"
7	内耳?	-	火舎か?内側に媒付着。	"	雲母、淡い茶褐色 長石少量、良い	"
8	カメ?	-	蓋付のカメ?	クロ整形、 輪積み	長石、少量 にぶい暗褐色 雲母、良い	"
9	灯明皿?	A - B - C 5.1	俗にカワラケ	クロ整形 回転糸引き後、 ヘラ整形	雲母多量 黒褐色(一部) 良い。	40%
10	灯明皿	A 12.3 B 2.2 C 7.1	俗にカワラケ	クロ水挽き 回転糸引き	礫多量 黒色 良い。	30%
11	カメ?	-	口縁部内傾し、円形の孔をもつ。 媒付着。	クロ水挽き	雲母、礫 茶褐色 良い	
12	不明		両側に口縁部状のナデ切れ目をもつ。	輪積み	長石、雲母少良、 にぶい黒褐色 普通	
13	摺鉢	A - B - C 14.7	常滑のすり鉢で小型。	クロ整形 回転糸引き	礫少量 茶褐色 良い	
14	水甕か?	-		輪積み	礫少量 灰褐色 良い	
15	坏	A 12.5 B 4.2 C -	内墨。	クロ水挽き	精選	30%
16	ホウロク	-	円形の足を3基もつと推察される。	輪積み クロ調整	長石 黒褐色 普通	覆土中

7 表探遺物

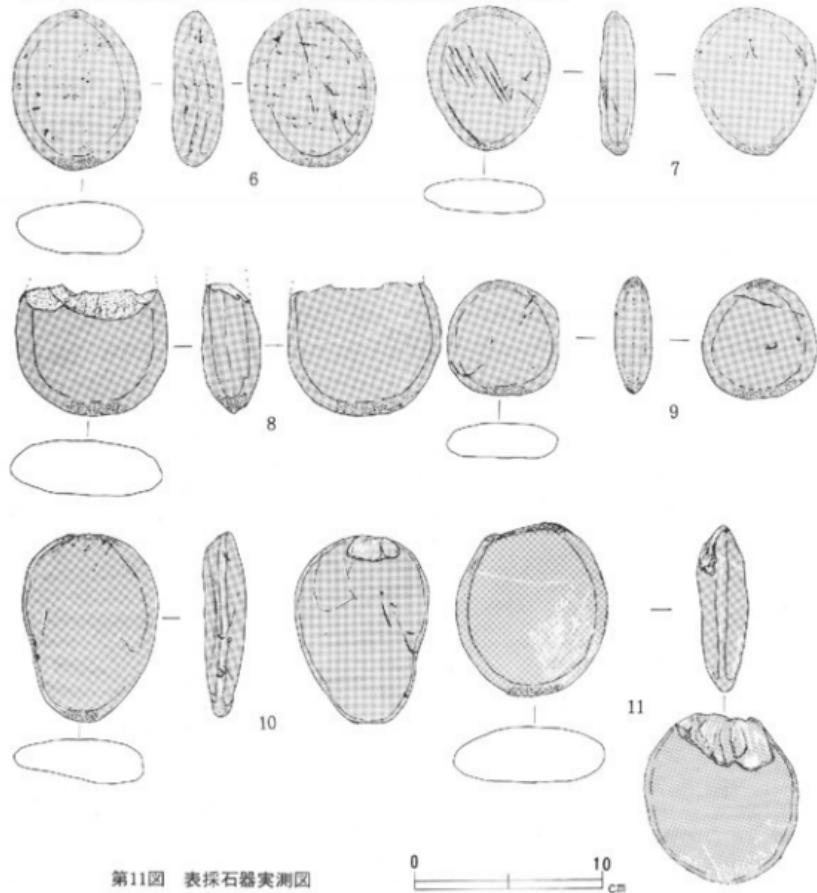
石 器 (第10図、第11図)

本遺跡からは11個の石器が出土した。いずれも川原石を加工した粗製の打製石器で加工痕も僅かである。先端部のみ加工したもの、全体的にわずかに加工したもの、把握部分のみが認められるもの等多様な形態である。磨石と推定される7、9が有る。重さは全体的に200～250



第10図 表探石器実測図

グラムではほぼ平均化している。石材は緑泥片岩である。なお本調査区域には縄文時代の遺構は検出出来なかった。周辺の台地上に遺跡が存在することが予見される。



第11図 表採石器実測図

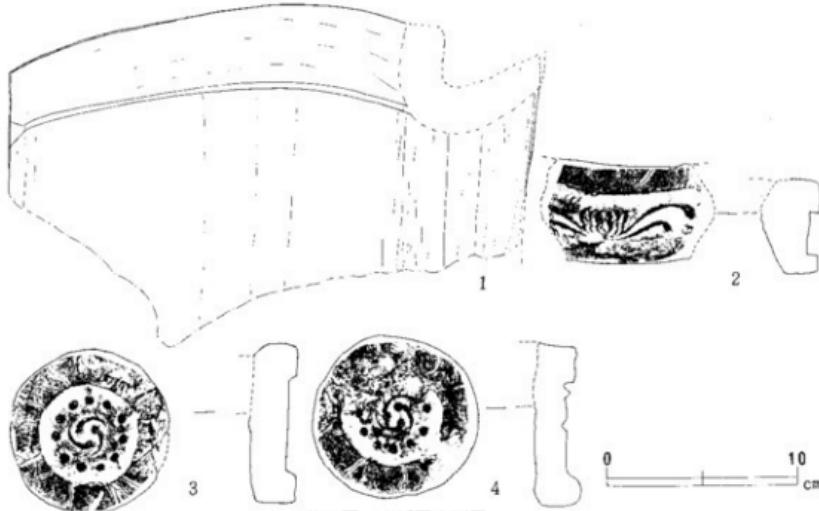
石器一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔石				
1	打製石斧	10.5	5.2	2.7	220	緑泥片岩	覆土中	加工痕わずかに有り。
2	"	11.7	7.4	3.8	390	"	覆土中	下部にあり。

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔石				
3	打製石斧	11.7	8.0	4.1	530		覆土中	全体的にあらく磨製。
4	"	10.7	7.1	2.4	260	綠泥片岩	覆土中	
5	"	9.1	6.8	2.2	190	"	覆土中	上部欠失。一部加工。
6	"	8.5	6.7	2.7	210	"	覆土中	ほぼ丸味をもつ。
7	磨石	7.7	6.5	1.8	120	"	覆土中	薄いが丸味をもつ。
8	打製石斧	6.8	8.1	2.9	240	"	覆土中	少欠失。やや刃先磨製。
9	磨石	6.5	6.1	1.9	100	"	覆土中	磨石状?
10	打製石斧	9.8	7.1	2.2	210	"	覆土中	上部欠失。そ雜。
11	"	8.9	8.2	2.9	270	"	覆土中	刃部加工。

8 瓦 (第12図)

本瓦は、いずれも遺構確認の為に作業中出土したもので軒丸が3個、平瓦が1枚それぞれ認められる。軒丸は巴に11個の花弁が見られる。全体に薄く江戸時代以降の遺物である。もうひとつは菊の花を持つ。平瓦はU字状の丸味を持ちやや厚い。西蓮寺修復時の破損品と思われる。



第12図 表採瓦実測図

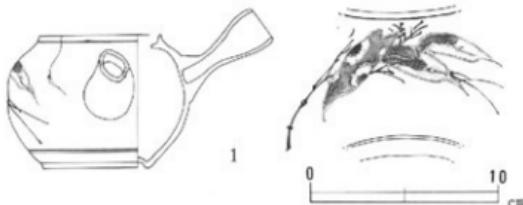
土製品一覧表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	平瓦	-	軒丸。やや厚い、火を受けている。	型ぬき	長石、黒褐色、媒付着右少	江戸時代か?

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
2	軒丸	-	やや写実的な菊の花の文様	型ぬき	長石、黒褐色、媒付着右少	江戸時代か!
3	軒丸	-	ほぼ円形。瓦質三巴。11の円形状花弁あり。	"	"	"
4	軒丸	-	"	"	"	"

9 陶磁器 (第13図、第14図)

陶磁器は、かなり出土しているがいずれも近世以降のもので所謂日常雑器である。4は常滑の蓋である。その他は茶碗、皿、杯、卵の模造品、急須などである。1は急須ではば現在の形態に近く昭和の戦前か、全体を竹の枝にし、葉のなかに梅、松を描いている。かなりこった絵柄で有る。3は碗か、トレンチ出土で陶器でロクロ整形痕を残す。5は、常滑の碗で彩色を二色に分ける。6は、碗で盤界の図か日の玉、鬼神?、黒鳥?がリアルに描かれている。7は碗で竹の葉に格子状の糸目が描かれている。8は皿でくじやく状の絵柄で基本は羊齒状の木?で有る。9はやや深い皿で小型、竹の葉が書かれている。10は杯で牡丹の花が描かれている。11は編目状の絵柄が書かれている。碗の一部と推定される。以上が本遺跡から出土した陶器の概要である。いずれも遺物から前述のとおり近世から戦前にかけての日常の茶器、仏具である。これらはみな後世の投げ込みであり直接遺構とは関係は把握出来ない。



第13図 表探出土陶器実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	急須	A 6.6 B 7.1 C 5.7	体部に竹の葉の絵。葉の部分に松・梅の絵を入れ込む。	ロクロ水挽き	- 白灰色に近い。 良好	70%
2	小型 茶碗	A 11.2 B 4.6 C 4.1	体部に菊の花2種の模写。	ロクロ水挽き	- 白色 良好	90% 覆土中

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
3	碗	A - B - C 4.5	常滑。表裏釉。	クロロ水挽き	礫少量 萌葱色 良い。	50%
4	茶壺 蓋	A 11.0 B 2.6 C 5.2	常滑。一部内側に切れ目をもつ。 焼成前の切れ目。	クロロ水挽き	礫少量 茶褐色 良い。	90% 覆土中
5	鉢状	A - B - C 5.1	台付。2色にわけられる。左右 対象。	クロロ水挽き	礫多量 灰・茶褐色釉を 当分してわかる。 良い。	覆土中
6	茶碗	A 13.3 B 7.3 C 5.6	靈界の絵か?日の玉・怪鳥が見 られる。	クロロ水挽き	- 白色 良い。	覆土中 50%
7	碗	A 12.3 B 4.9 C 4.3	竹の葉を2色に分け緑・こい青 で中に日の丸状のマス目をもつ。	クロロ水挽き	- 白色 良い。	覆土中 40%
8	皿	A 15.6 B 2.9 C 9.1	シダ系類の葉を全面に絵描く。 台付皿。	クロロ水挽き	- 白色 良い。	覆土中 50%
9	深皿	A 12.9 B 4.0 C 4.5	竹の葉を上下にちらす。 台付。	クロロ水挽き	- 白色 良好	30% 覆土中
10	杯付	A 6.4 B 4.7 C 3.2	牡丹の花柄で12角形のやや大き めの杯付。	クロロ水挽き	- 白色 良好	覆土中 60%
11	碗	A 12.9 B 5.2 C 11.5	編目状の文様をもつ。	クロロ水挽き		覆土中
12	タマゴ	A - B 5.4 C 4.1	卵の模造品。小口をもつ。半分 ずつをあわせてつくる。	手づくり。	- 灰白色 良い。	覆土中 98%



第14図 表探出土陶器実測図

西蓮寺の創立と沿革

西蓮寺は天台宗に属し、戸羅度山曼殊院西蓮寺と称する。延暦元年（782）桓武天皇勅願の靈場として、最澄の弟子最仙の創立するところと伝え、天台宗年表、延暦元年の項に『常陸國西蓮寺建つ』（高僧伝六十四）と載せられている。その後一時荒廃したが、鎌倉時代中期末、比叡山無動寺谷の慶弁阿闍梨が来山復興したと伝え、地内に塔頭2寺6ヶ坊があり、近郷にも多くの末寺を擁して、この地方有数の大寺であったと云う。また天台宗特有の法要、常行三昧会も早くこの頃に始まり、中世を通じて盛んになり多くの意味で西蓮寺寺運の大きな支えであった。この法要は江戸時代に入って、西蓮寺の常行会仏立てとして益々有名になり、多くの信者が近郷近在から参拝するのは勿論、それを目当てに多数の商人があらゆる物資を持ち寄り、遂に大きな西蓮寺市を築き上げたのである。江戸時代の後半、そのために寺の表参道の両側に市のための町屋が建ち並び、盛況を極めた様子が伺える。しかしこうした市場の機構と運営は、明治・大正・昭和と大きく変わっていく世運には乗り切れず、特に第2次世界大戦後、現代に至って衰退してしまった。只常行三昧会そのものは篤信者の護持により、今にその伝統が保たれている。

寺伝によれば、中興慶弁阿闍梨が、弘安10年（1287）元寇の役の戰勝記念に相輪様を建立し、仁王門も同9年に彼が建立したとされてきた。ただ慶弁阿闍梨については、開創の最仙と同じく所伝も不足で全く明らかでない。しかも西蓮寺の中興の第1世は、明らかに東範僧正（貞和2年、1346、没）と寺伝にあり、その間50年程の開きがあり中興そのもの内面については、疑問を残している。因に東範僧正が関係している近くの寺院を列記しておく。

宝幢院 中興 観応2年（1351）	光照寺 開山 康永2年（1343）
蓮城院 中興 貞和2年（1346）	西光寺 開山 貞和2年（1346）
觀音寺 中興 観応2年（1351）	東福寺 開山 観応2年（1351）

また当寺は曼殊院とも称するが、これは建武の頃京都曼殊院門跡忠尋大僧正が、混乱を避けて当寺に隠栖され、曼殊院を称することを許可されたに始まると言ふ。

中興西蓮寺の第1回災禍は、一山を殆ど焼失したという明応8年（1499）の兵火であった。その後2年目の文亀元年（1501）には早くも常行堂が建てられ、翌2年には常行三昧会が修されたという。更に先に弘安9年の建立と云われた仁王門も、明応の火災後44年目に当たる天文12年（1543）に復興されており、室町時代末期には寺觀は概ね旧規に帰ったと見られる。

桃山時代には、天正4年（1576）には仁王門の、慶長9年（1604）には相輪様の修理の事が知られている。江戸時代に入って、西蓮寺は一時東叡山寛永寺末となり、徳川家から朱印状をうけ、30石の寺領を与えられ、学頭寺としての格式を持つ大寺であった。寛文13年（1673）には、明応の兵火後再建された常行堂が破壊著しく、更めて再建されている。現在使用されている、常行三昧縁起はこの時代の縁起を宝曆7年（1757）に筆写したものと云われて

いる。この頃寺は再び繁栄し、寺觀を取り戻したように思われる。安政7年（1860）には仁王門の上層部を取り除き、これを表参道坂口にあたる現位置に移建している。

当寺は、明治16年1月6日の夜再び火災にあい、庫裏・本堂・中堂・常行堂・長屋門・物置等灰燼に帰し、仁王門と相輪様を残すに至る。このとき累代の記録や資料は焼失散逸し、殆ど何も残さなかったようである。翌17年には、いち早く常行堂を復興し、庫裏を移築して寺務を再開し、同22年には鐘楼が、43年には客殿が再建されている。

大正6年（1917）には、仁王門及び相輪様が国の特別保護建造物に指定され、のち法律の改正により、昭和4年国宝に、更に昭和25年重要文化財に指定されている。昭和27年には、中堂（薬師堂）を移築再建し、33年には本尊薬師如来坐像が、茨城県指定文化財の指定を受けている。

今回の発掘調査に当たり、井戸と建物の柱跡と思われる穴が幾つか発見されているが、当該の場所に寺の建物があった記録は全く無い。参考までに寺中8坊と云われている坊舎について記しておく。

1. 宝樹坊（宝聚坊）小字宝樹坊の地名あり。
2. 財林坊 北野天神を祭る。小字財林谷にあり。
3. 常蔵坊 五靈権現、山王を祭る、小字五靈、山王の地あり。
4. 衆蔵坊 愛宕様を祭る、小字愛宕山にあり。
5. 杉本坊 香取明神を祭る、境内にあり。
6. 地福坊 稲荷明神を祭る。
7. 天樹院 弁天を祭る。
8. 円照寺 稲荷明神を祭る、小字稻荷山にあり。

上記の8坊が存在していたことは間違ひ無いが何時の頃から在ったかということは、判然としない。天文12年、柱立てと証明された仁王門の頭貫上の墨書きの中に、「寶聚坊」の文字がはっきりと残されていることから考えると、1500年代には存在していたと考えられる。なお地名として小字で残っているものは、宝樹坊、財林谷、衆蔵坊、稻荷山、弁天、等々興味深い地名が残っている。因に今回の発掘場所は『寺前』と云われる地名が残されている。

現西蓮寺寺地の『小貴館跡』としての指定に關係する文書としては、次に掲げるもの以外には見当たらないのが現状である。

即ち『玉造史叢』第4集（昭和30年出版）西蓮寺についてのあれこれと題した文章の中に、鹿島郡鉢田町鳥栖の新堀太衛門氏（祖先は新堀館主）所蔵の古文書に次のように記録されている。

新堀文書

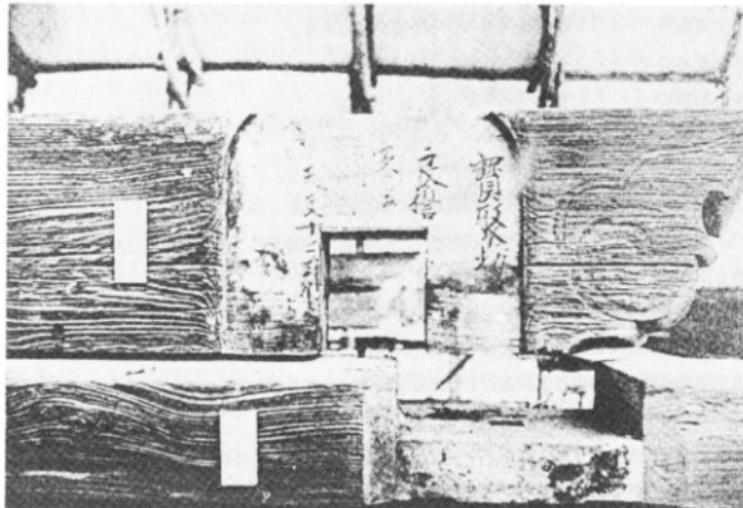
西蓮寺館主 小貫内蔵 小鷹治部大輔よりの命に依り館主となる。佐竹氏の為亡 後浪人となる。子孫に小貫彦兵衛あり、新庄越前守（麻生藩主）仕う。館地西蓮寺院内となる云々。

岸沢文書

小貫内蔵 小高城主より遣わされて西蓮寺に館を築き住む。天正19年佐竹義宣の為亡さる云々。

と記載されている以外に、寺に残されている文書類には、全く館跡に関する記載はない。ただ現況はたしかに空堀と思われる跡も残ってるし、安政以前は表参道であったといわれる袖切坂周辺の様子をみても、館跡の形跡を残している。よって昭和34年頃、茨城県遺跡台帳に登録され、今日に至ったものである。

今回の発掘調査は、その一部の低い谷の部分の緊急調査を実施したものであるが、広い境内地とそれに続く山林（約20,000平方米）全体が指定されている現状を考えるとこれ以上の調査は、不可能に近いと考えざるを得ない。



仁王門頭貫上の墨書

VI 結 語

本遺跡を調査して感じたことを列記し若干の検討を加え結びに替えてみたい。

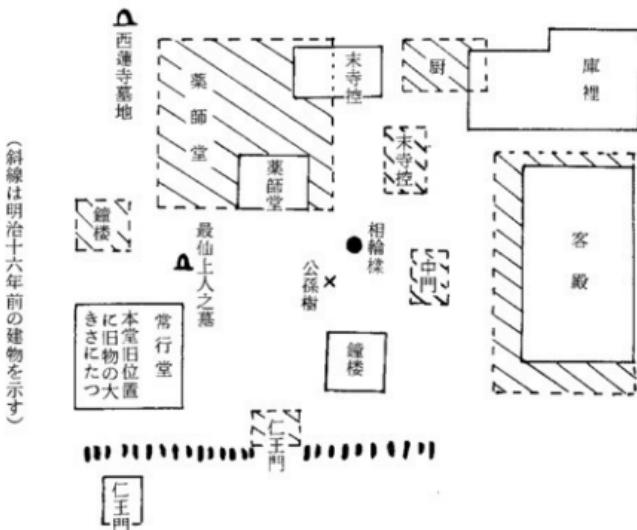
本遺跡と館、西蓮寺はきっとも切れない関係にある。まず問題になる事は館が存在しその後、天台宗の常陸高野と言われる西蓮寺が移転してきたのか?、それとも西蓮寺が建立された後、小貴館が築造されたのか現在存在する資料を基に検討を加えてみたい。

小貴館、以後館は第3図に示すとおり大手口、虎口を持ち空掘を掘り土壘が存在、土橋も認められる。館としての遺構が存在している。これは事実として認めなければならない。縄張りは必ずしも寺院の建立から明確に断定は出来ないがほぼ戦国時代前半期の様相を残す。少なくとも2曲輪ないし3曲輪に分割されると推定出来る。

西蓮寺は小史常陸高野、西蓮寺史研究の中に触れられるとおりに理解すれば桓武天皇時代に堂宇の建立がなされている。延暦元年勅願、伝教大師高足最仙上人開山也と有りこの説とれば小貴館の存在はない。ここに矛盾が存在する。

西蓮寺と館は年代的にかなりの時間的差が見られどのような計算からもこれを埋めることは不可能である。調査の結果本寺が戦国時代に存在している事は明白である。とすれば館はどのような状態で存在したのか、それには同時に存在したと理解するほか答えは存在しない。

西蓮寺が建立され戦国動乱の中、西蓮寺と地頭の小貴氏は自分の館を要害としての備えを行い



第15図 明治16年前と平成8年の現況図

小貫氏はこれを利用して縄張りを行い要害の築造に協力し自分の居場所要害を南東側の現在土塁、空堀、土橋の存在する部分に曲輪を定めた。この方法が二者が同時に存在する唯一の方法、形態である。それほど小貫氏の勢力が弱く西蓮寺の元でしか乱世を生き抜く他はなかった。それが次第に西蓮寺の支配下でしか活動、勢力を持つことが出来なくなつた。と理解するしか理論的にならない。そして次第に勢力を無くしていった。

前述の方法で、西蓮寺の台地、寺坊を再見してみれば必ずしも夢物語ではない。現在遺存する遺構を前述の思考方法で理解すればほぼ両者の並立は可能であった。それはあくまでも戦国の時代のみで豊臣、織田、徳川の時代に成ってからは不可能である。

西蓮寺の堂宇は創建時とは違いが見られるが大きく変化しているものは山門の位置、つまり本寺の参詣の道で有る。次に鐘楼の位置、中門の欠失、薬師堂が4分の1前後に規模が変わった事、本堂部分に常行堂が建かえられた事等である。第15図が比較図である。

これらから推察すれば住職の見解との差がないと理解され、小生の見解が肯定され、前述の推論は史実に近いと思われる。

以上簡単に西蓮寺と館の関係に触れてみた。大方の御教示をお願いし結びにかえたい。

なおトレンチ出土の人骨は歯、副葬品が出土していない事から罪人の可能性が高い。又建屋は本寺の修業僧の道場と理解すべきと考える。

最後に当たり住職を始め御家族、檀家総代、檀家の皆様、兼平工務店、玉造町教育委員会を始め多くの方々の協力を受けた、記して感謝の意を表したい。

(了)

抄 錄

フリガナ	オス キ ゃカタアトハシクツテヨウサホウコク シヨ
書名	小貫館跡発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	汀 安衛、鈴木亮然
編集機関	鹿行文化研究所 / 〒311-22 茨城県鹿嶋市青塚690
発行機関	玉造町教育委員会、玉造町遺跡調査会 / 〒311-35 茨城県行方郡玉造町甲404
発行年月日	西暦 1996年5月31日

所収遺跡名	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
オヌキヤカタアト 小貫館跡	イバラキケンタメカタ 茨城県行方 ダンタマツクリマサイ 郡玉造町西 レンジ プザ ナラマユ 蓮寺寺宇前	08255	1505	36° 4' 7"	140° 26' 34"	19960513 19960524	2,000 m ²	墓地造成工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小貫館跡	城館跡	中世	井戸 建屋跡 2軒	縄文時代の石器 陶磁器 鉄滓、古銭 人骨、 五輪、塔水輪	寺院と館の関係で鹿行地域では重要な遺構である。

写 真 図 版

P L - 1



表土除去後の全景



館・虎口と調査区

P L - 2

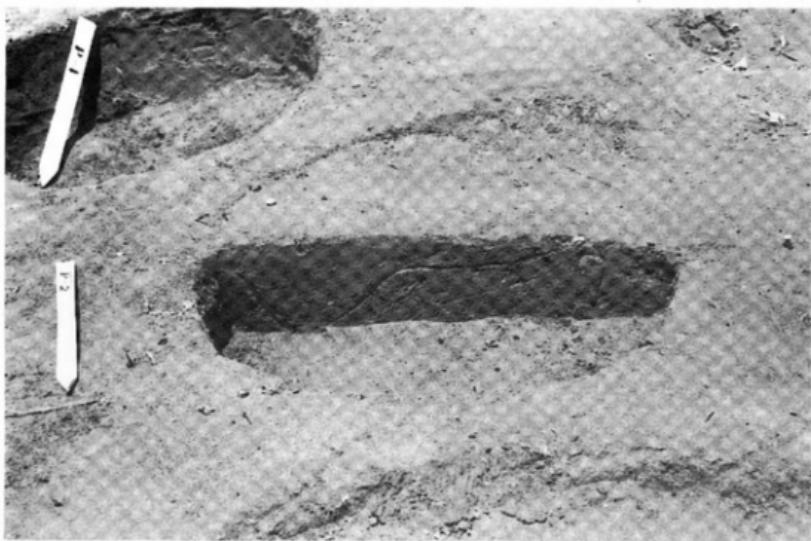


調査区・虎口全景

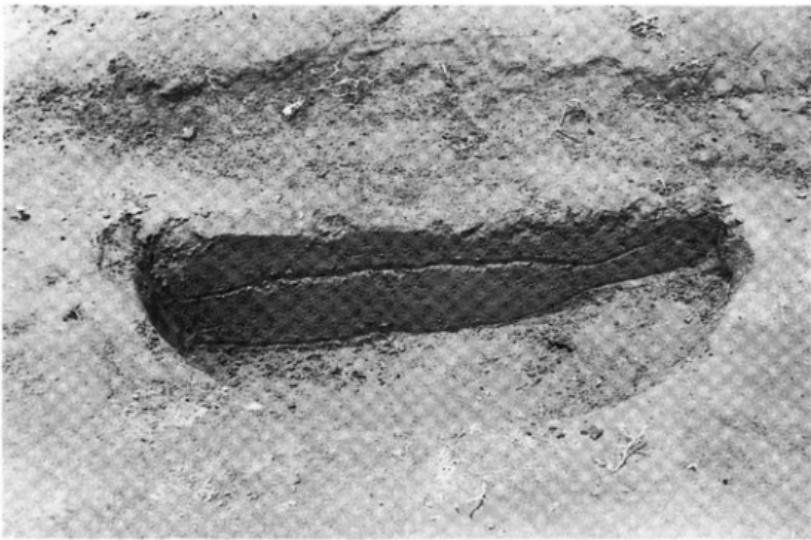


虎口と法面全景

PL-3

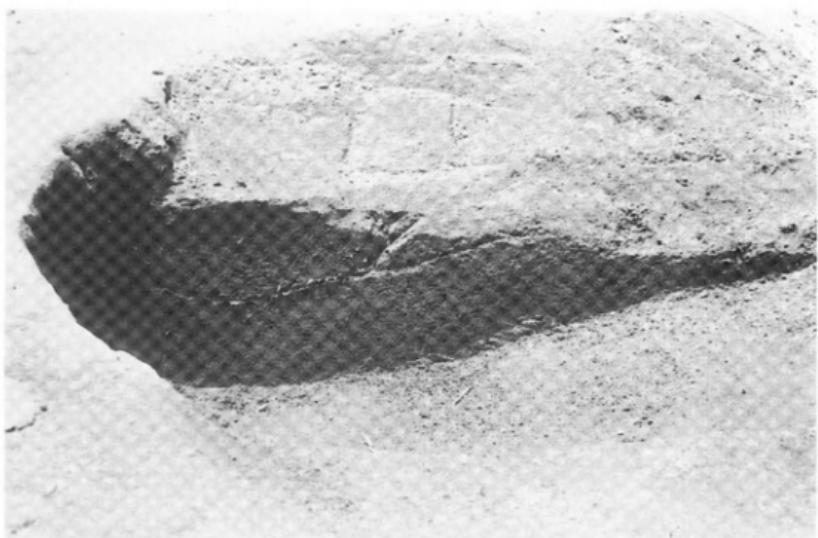


柱穴 1 号, 2 号土層

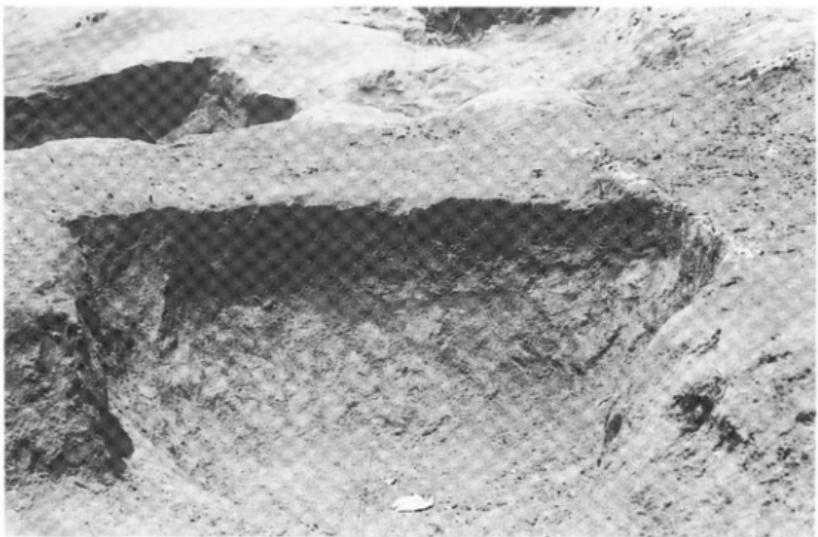


柱穴 3 号土層

P L - 4



柱穴 4 号土层



柱穴 5 号土层

PL-5



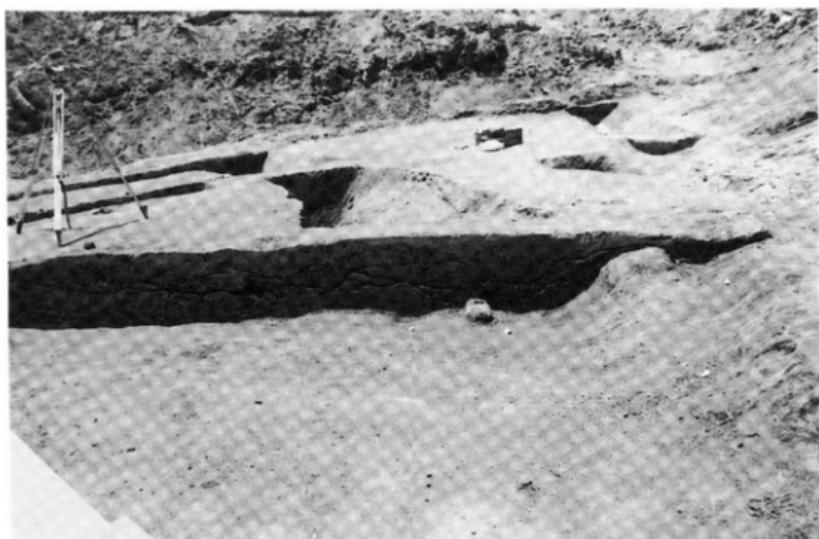
調査終了全景



建屋柱穴群と溝

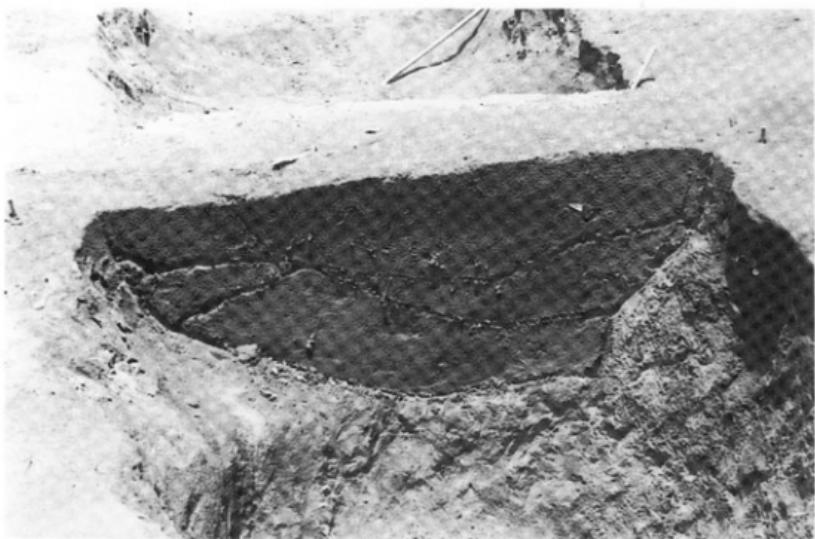


2号溝のプラン

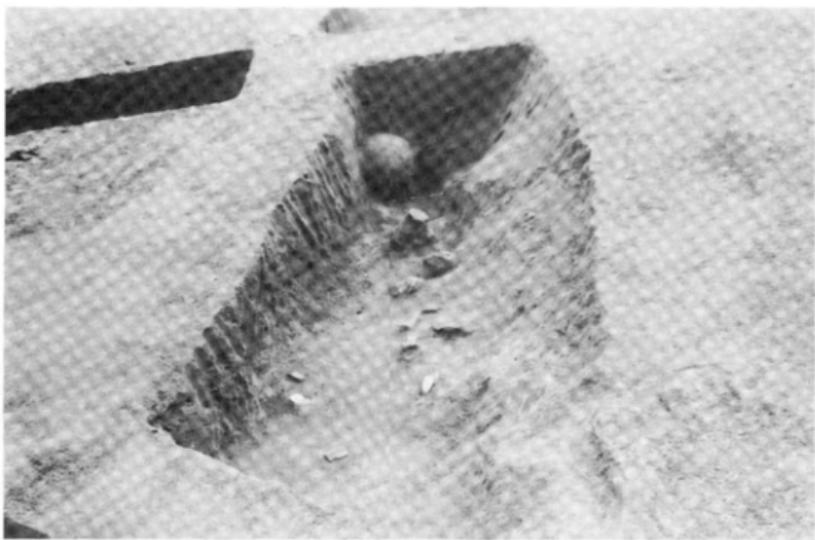


2号, 3号溝土層

P L - 7



3号溝土層



3号溝遺物出土状態

PL-8



井戸遺物出土状態

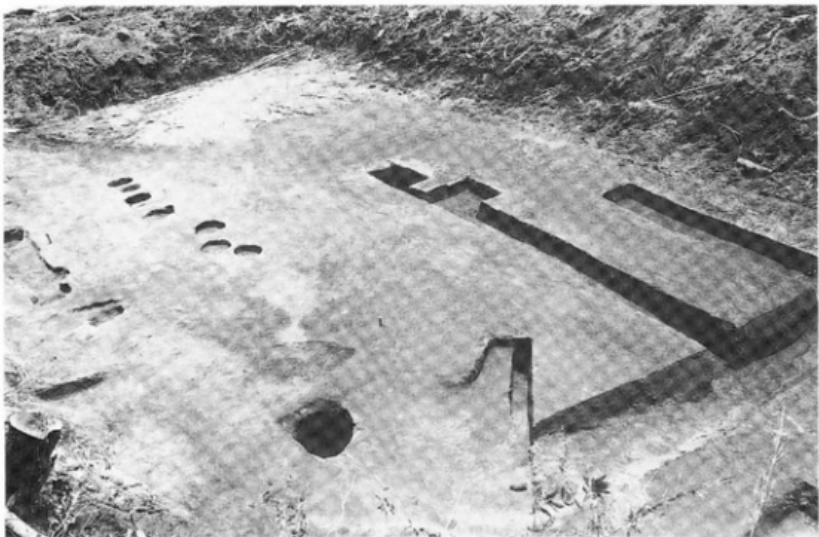


井戸終了状態

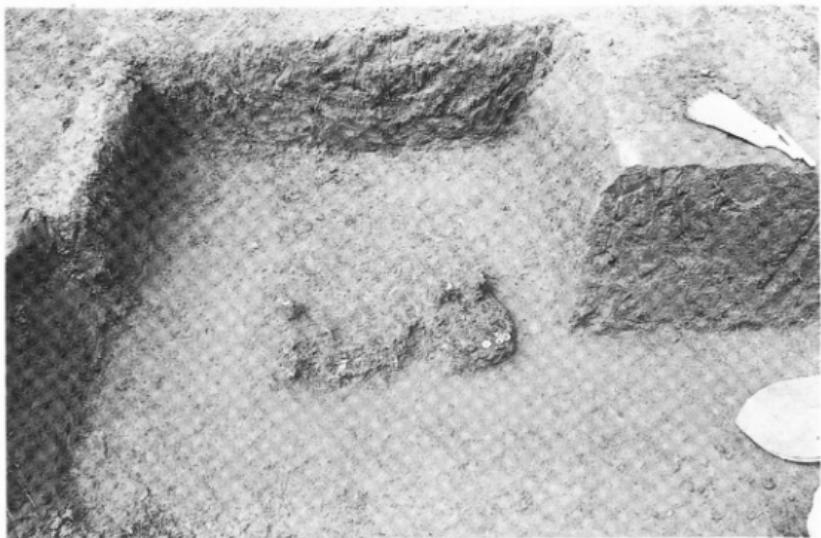
PL-9



調査終了全景（参道側から）



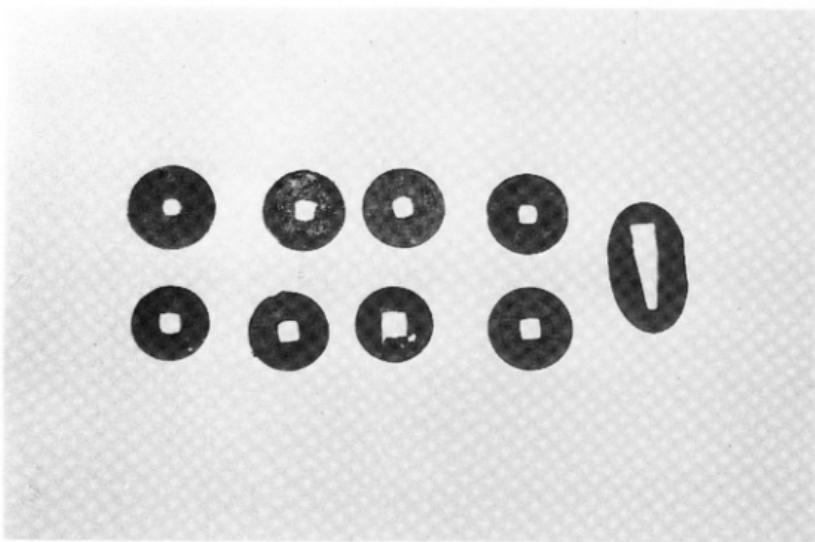
同全景（虎口側から）



人骨・六文銭出土状態（トレンチから）



供養祭



六文銭と刀装金具



御協力をうけた方々一同



五輪塔の一部



車止めの石柱



灯籠



墓石？



出土土器（溝ビット）



表採瓦



急須・壺・卵の模造品・
摺鉢・その他



陶器・陶磁器



西蓮寺山門と常行堂



山門全景



相輪様

小貫館跡発掘調査報告書

印 刷 平成 8 年 12 月 31 日

発 行 平成 8 年 12 月 31 日

編 集 麗行文化研究所

発 行 玉造町遺跡調査会
玉造町教育委員会

印刷所 倍さんゆう社印刷
